

佐々木啓一著

椎名麟三の研究下

桜
楓
社

昭和五十五年三月五日 初版印刷
昭和五十五年三月十日 初版発行

定価二八〇〇円

著者 佐々木啓一

発行者 及川篤二

印刷所 足柄製版印刷KK

101 東京都千代田区猿樂町二一八一三

(株)桜楓社

(〇三)二九五―八七七一(代)
振替 東京 六一―八〇二〇

上 卷

まえがき

椎名麟三・その文学と思想 序説……………9

——戦時下に於ける文学的自立とナショナリズム的傾向に就いて——

椎名に於ける戦時下の思念……………60

——未定稿「愛国者」（未発表）を中心にして——

椎名麟三・その文学と思想……………89

——戦時下の未発表小説「霧の旅愁」に於けるナショナリズム的構造——

※ ※ ※

椎名麟三の転向体験……………111

——ニーチェ的思惟の側面——

椎名文学に於ける成熟と受難……………123

——小説「証人」を中心にして——

椎名麟三……………158

——「虚構の身分」からの文学的出発をめぐって——

椎名文学に於ける死と再生の意味……………181

——「自由の彼方で」の執筆をめぐって——

椎名麟三の研究 目次

下 卷

椎名麟三の内的受難史よりみた「九相絵」体験の世界	209
——「永遠なる序章」を中心にして——	
「戦後派」の文学	224
——椎名麟三「深夜の酒宴」論——	
※ ※ ※	
椎名文学に於ける家父長権奪取の問題	229
——「島長の家」を中心にして——	
習作期の椎名文学の世界	277
——主体的自由と家長意識の相克——	
椎名文学に於ける家父長権宣言の問題	289
——「黒い運河」から「深夜の酒宴」へ——	
椎名麟三年譜	317
主要研究文献目録	371
初出書誌一覧	382
大坪家（大坪昇・椎名麟三）の略系図	383
大坪家周辺の旧宅（江東橋）付近の見取図	384
あとがき	385

椎名麟三の研究 下

佐々木啓一 著

椎名麟三の内的受難史よりみた「九相絵」体験の世界

——「永遠なる序章」を中心にして——

戦後派作家のひとりとして、戦後の文壇にデビューした椎名麟三の最初の書き下ろし長篇小説が「永遠なる序章」である。この作品の脱稿は、昭和二十三年四月二十四日で、同年六月、河出書房より単行本として刊行をみた。本論考では、冬樹社刊行の『椎名麟三全集』第一巻所収の「永遠なる序章」⁽¹⁾を使用する。

筆者は、この「永遠なる序章」の一人物によって語られる所謂「地獄絵」体験（実は、「九相絵」体験乃至は「九相観之図」の体験と修正すべき性格のもの⁽²⁾）の内実的な意味を、作品の構造を分析することによって捉えながら、椎名の作家としての全体像の一端に迫ってみたいと考える。

椎名の戦後派作家としてのデビュー作は、昭和二十二年二月号の雑誌「展望」に掲載された「深夜の酒宴」であるが、この作品の主人公の須巻は、「僕には思い出もない。輝かしい希望もない。ただ堪えがたいだけである。（中略）僕はただ堪えがたい現在に堪えているだけなのである」と、自己の心情を語る。

ここには、「堪える」という生き方しかない主人公の内部の暗黒の廃墟とでもいうべき部分が開示されている。転向体験の重荷と、それによる最下層の庶民社会の生活者のひとりとして生きて来た椎名が、自己に巣くうニヒリズムと闘うときの姿勢は、暗闇の中でじっと「堪える」という生き方で示され、それが自己の根源的な存在理由に

もなっている。続いて四ヵ月後の昭和二十二年六月号の雑誌「展望」に掲載された「重き流れのなかに」の主人公の須巻は、「——僕に未来はない。そして過去はほろび去っている。ただ僕は一個の廢墟だ。その僕には、僕自身は既に僕の發生に於てほろびていたのだという自覺だけが重く心を満すのである。運命をもった瞬間に僕はほろびていたのだ。今僕があるのはただ具体的な死へ存在している一個の廢墟に過ぎないのだ」と自己を位置づける。主人公は、「堪える」という実存の苦悩に対して反抗を試みようとする。自己を存在させた超越者に対する意識的な反抗である。昭和二十三年一月創刊号の雑誌「個性」に掲載された「深尾正治の手記」になると、他人が、自己の意思に反して否応無しに、現実的な空間のみでなく、心的空間とでもいうべきものをも侵略して来るのである。つまり、主人公は、自己の重さばかりでなく、他人の重さまで意識させられて、それが逆転して、所謂對他意識を目覚めさせることになるのである。主人公が隠れている木賃宿に、二十歳位の肺患の家出娘が転がり込んで来る。主人公は彼女に、死んでからの墓地の段取り、棺桶の寸法を直接訊ねる。香奠を置いて帰る。彼女に借金する。病気で死ぬのを待つより、自殺することをすすめる。しかも、主人公と共に心中することを、である。こうした主人公の陋劣、醜惡ともいえる意識構造の変化が徐々に進められる中で、自己の存在の苦悩を他者のそれと対立させることで、それがかえって苦悩共同体的な他者志向を想念の構図として思い描いてみるのである。

やがて、半年後に發表をみた「永遠なる序章」に至って、これまで作品の中で試みられ進められて来た苦悩共同体的な他者志向が、状況閉塞感の粹を意図的に脱して、作品の構造の中で前面に押し出されて来るのである。

因に、昭和二十二年秋から翌年の春にかけて、国の内外の政治情勢の変転も然る事ながら、文学に限っていえば戦後派作家が擡頭し、椎名は、戦後派文学者としての自己の立場を自覺して、「戦後文学の意味³⁾」という評論を發表している。

一方、花田清輝は、雑誌「新小説」の昭和二十三年十二月号で、「椎名麟三論」（特輯・新人論Ⅰ）を発表して、その論の終わりを、次のような言葉で結んでいる。

僕は椎名がサルトルなんか気にかけず、ゴロキイでも再読してくれるといいと思うよ。うっかり流行作家にでもなるものなら、かれの絶望は、たちまち希望に変わるかもしれん。——魯迅曰く「絶望の虚妄なること、まさに希望と同じだ」と。椎名のばあいも、やつぱりそうかね。

椎名の他者志向を見抜いていたかどうかは別にして、椎名に焦点を当てながら戦後派文学の動向について、花田は、その状況をよく見通していたといえる。

また、同じ戦後派作家のひとりである埴谷雄高氏は、「永遠なる序章」に解説を加えて次のように述べている。

前方の光を望見する苦悩のなかの一安定期のはじめに置かれるのが、「永遠なる序章」なのである。ここでは数箇月後に死がやってくる具体的な運命を全身に担った主人公安太と、抽象的な死の理論を掌のなかにもった銀次郎の二人が「死」をはさんで立っているという謂わば死の対立の構図がとられているが、その陰惨な筈の構図が思いのほか暗くなく、むしろ、明るいのが特徴的である。

「一安定期のはじめ」が、ここにはじまるのである。

三好行雄氏は、『戦後文学』の輪廓⁽⁵⁾の章で、次のように論じている。

（戦争へのあらたな危惧が生じたことによる戦後文学の内的変質など）をあわせて、わたしは一九四八年と四九年の交に、戦後文学の一劃期をさだめてみたいとおもう。戦後文学のいわば第一段落が、すなわち文学運動としての自己主張が最も活潑に展開された時期が、この時点において終了したのではないか。戦後文学はこの時を転機として、次のあらたな段階に発展（もしくは変質）していったようである。実存的関心から社会的関心への脱

出が、戦後文学の新方向として指示されたのも、またその線にそって「永遠なる序章」が出現し、戦後文学變貌の転機を告げる作品として論じられたのも同じ頃であつた（傍点引用者）

両氏の「永遠なる序章」に対する評価は、表裏一体の関係にある。

さて、埴谷氏が、「永遠なる序章」の主人公の砂川安太と、副主人公的な竹内銀次郎との間を、「死の対立の構図」として、図式的に捉えていることは、引用の通りであるが、筆者は、その「対立の構図」の一方の人物である銀次郎の「抽象的な死の理論」を、根源的に支えている原体験に、「九相絵」体験があり、それが銀次郎の死の觀念を増殖させて来たと理解するのである。銀次郎の妹の登美子の口を借りて語る銀次郎の「九相絵」体験に関する告白は、妹の登美子の視点によって捉えられた銀次郎の人間像の重要な一面である。ただ、自己告白という銀次郎本人による衝迫性は期待出来ないが、自己自身が決して他人に告白することの出来ない忌わしい体験を、妹の登美子が暴露してしまうということで、逆に、自己告白にはない客観性と真実性と説得性を獲得していると考ええる。登美子は、砂川安太を前にして、兄の銀次郎の恥部ともいふべき不可触の部分のように語るのである。

でも、兄は……。いつか、自分を知っているものは、ただ砂川さんひとりだとふといったことがございますわ。ほんとに、兄はさびしがりで、それに可哀そうなところもございますのよ。兄があんなった一番の原因は、わたし、祖母がいけなかったのだと思います。母からいろんなことを聞いて、そう思えるのですわ。それは、兄が六つぐらいのときですわ。祖母につれられて、お寺まいりをしたことがございますの。そしてお坊さんの説教を聞いているうちに、急に兄が蒼い顔になって、泣き出しましたの。どうしても泣きやまないので、祖母は、仕方なくつれて帰って来たのですけど、その晩から、兄はひどい熱を出して……こわい、こわい、というたわ言ばかりいつていたそうですわ。兄が少しよくなったとき、母がそれとなくなたしかめると、お寺の壁

にかかっていた絵が、原因なのですね。——わたしも、一度、見たことがございます。父の法事をその寺でしたときに。それは大変いやらしい掛図で、でも、わたしには、いやらしいと思っただけでしたけど、色がいやらしいですね。あの死人の色が。どこかきたならしい膿のような青い色に塗ってあるのですわ。その掛図には十二に区切った絵が入っていますの。最初の絵は、お葬式。それから額に三角の紙をつけたまま、樹の下に捨てられているんですの。そして、だんだんくさって行き鳥がその肉をついばんだりして、骸骨だけになり、そして、最後にはその骸骨さえもちりぢりになっていて、それを十二の絵で描いてあるんですの。……今でも、兄は、お寺の前は、走るようにして通りますわ。

以上が、登美子によって語られた銀次郎の幼児期における「九相絵」体験なのである。

椎名自身が、幼児期に情緒的にうけた所謂「地獄絵」体験（実は「九相絵」体験）は、彼の諸作品の中で、繰り返し恐ろしい体験として語られている。文学作品即ち小説の中で語られるのは、恐らく「永遠なる序章」だけである。

次に、その諸作品の中で語られている椎名の「地獄絵」体験の二、三について挙げてみる。

まず、「わが心の自叙伝^(?)」の中で、次のように体験を表明している。

大阪に七年いた。どういいうわけか知らないが、転々と住所がかわって行った。その私の記憶に残っていて、大げさにいえば私の精神史に影響をあたえていると思われるものが二つある。一つは母につれられて天王寺へ行ったときのことだ。私は泣き出したのだ。あの地獄絵を見たからだ。一本の木の下にむしろがしいてあって、そこに死人が横たわっている。まわりに人々が（後での推測だが親類縁者なのだろう）とりかこんでいる。やがて死人が放置され、カラスたちが来てついばみ、骸骨（がいこつ）となって、最後にはその骸骨が四散するまで

を、極彩色で描いてあったのだ。その絵はいまだにくっきりと思い出せるが、しかしそのときの印象ではなくて、後年修正しつづけて来たのではないかとあやしいものだ。だが、私自身はその絵を思い出すたびに、幼時の記憶として考えて来たようである。おそらく五歳ごろだろうから「死」というものを知っていたわけではあるまい。だが、ひどい恐怖を感じたことはまちがいないようだ。大体が人をおどかすための絵なのだから、幼年の私もおどろかされても仕方がないにしても、あんな絵は幼児教育にはなはだよろしくない。少なくとも私のような変てこな人間になる原因にはなる。むしろその絵に変てこな私の全部の原因があるといっているのではない。フロイトにしたがえば、そうならざるを得ないといっているにすぎない。

また、エッセイ「感想一東」⁽⁸⁾の中の、「母を語る」の章で、次のように語っている。

そのとき私は、本堂の欄間というのですか、そこにかかげてある地獄絵がこわくなってしまったんです。あの一本の樹木の下にむしろをしいて、死人が横たわっている。やがて烏どもが来て、その死人をついばみはじめる。そして最後には、ばらばらの骨になり、頭蓋骨も、いわゆるされこうべになってころがっている。それを十二枚か九枚か忘れましたが、何枚かの絵であらわしているんです。

また、座談会「キリスト教と仏教の出逢い」⁽⁹⁾での、椎名の発言記録では、次のようになっている。

女人堂⁽¹⁰⁾へ行くと、地獄絵というものがあるんですね。(中略)天王寺にも同じようなものがあります。極彩色に描いてあって、ちよつと残酷趣味みたいなものです。

以上のほか、エッセイ「蜘蛛の精神——自分の影響を受けた人々——」⁽¹¹⁾、エッセイ「モラルについて」の第七章「罪と罰」⁽¹²⁾、エッセイ「サルトルの『言葉』」⁽¹³⁾を讀んで「エッセイ「死について——緑色の小箱——」⁽¹⁴⁾等の中でも、自己の所謂「地獄絵」体験として語っている。

筆者は、補助的なことであるが、念のため、椎名が幼時にみたという大阪の四天王寺に赴き、その寺務局に永らく勤務しておられた郷土史家でもある牧村史陽氏に会って確めてみたのであるが、四天王寺にはその種の絵掛図はないということであった。また、五、六歳頃（大正五、六年頃）に住んでいた同じ天王寺区下寺町一丁目の浄国寺にも出向いて尋ねてみたがないとのこと、さらに椎名の母の実家の近くで、椎名が少年期を過ごした姫路市書写の近くの円教寺の境内にある女人堂（天台宗如意輪寺）の住職の西川氏にも人を介して照会してみたがないとの返事をもらった。従って、椎名が、所謂「地獄絵」をみたのは事実であろうが、その場所は定かでない。

筆者は、たまたま知人から小野小町をモデルにしたと伝えられている美人の死骸図の絵巻になったものの一部を借覧させてもらい、さらに、京都市東山区松原通大和大路東入の西福寺（浄土宗）に寺宝として秘蔵されている伝小野篁筆の「檀林皇后九相図絵」⁽¹⁵⁾を野村住職にみせてもらったりして、椎名の語っているのと類似の「九相絵」の実物に接することが出来た。さらに、昭和五十二年三月、中央公論社から刊行された『日本絵巻大成』の第七巻の「餓鬼草紙・地獄草紙・病草紙・九相詩絵巻」編で、「九相絵」を具にみる事が出来、また、平仮名絵入『往生要集』⁽¹⁶⁾にも木版刷りの類似の「九相絵」が挿入されているのを見た。

「九相」について解説したものは、前掲『日本絵巻大成』第七巻に付いている中村溪男氏の論文「九相詩絵巻の成立」の中で、次のように論じている。

仏教用語では、「九」を「く」と読ませている。また、数のきわまり、数の終わり、と字義としていているところから、「すべてのこと」と解釈しているようである。（中略）さて、問題の「九相」であるが、『仏教大辞典』の「九想観」⁽¹⁷⁾によれば、「九種の想を凝らす観の意で、また単に九想（または相）ともいう。いわゆる観禪不浄観の一種にして、すなわち五欲の法に貧著^{どんじやく}し、美好耽恋^{たんれん}の迷想を起こせる者をして、人間の不浄を覚知、

その情欲を除かしむる観想をいう」とある。(中略)ちなみに、「想」は觀念であり「相」は実相である。したがって、絵画に具現する九想は「九相」とするのが妥当と思われる。

「九相」の具体的な内容については、前掲の『日本絵巻大成』第七巻「九相詩絵巻」では、蘇東坡の九相詩によって、次のように分類している。

第一 新死相・第二 肪脹相・第三 血塗相・第四 肪乱相・第五 青瘀相・第六 噉食相・第七 骨連相
第八 骨散相・第九 古墳相

右と類似の分類は、天台智顗による『摩訶止観』⁽¹⁷⁾巻第九の上の第六節三「諸禅の様相」の中にも次のように述べられている。

つぎに、不浄禅の発するを明かさば、まず九想についてまた兩となす、一には壊法の人、二には不壊の人なり。もし壊法の人の修する九想は、一には脹想、二には壊想、三には血塗想、四には膿爛想、五には青瘀想、六には噉想、七には散想、八には骨想、九には焼想なり。

源信(恵心僧都)の著わした『往生要集』⁽¹⁸⁾巻上の「第五、明人道者、略有三相、応審觀察、一不浄相、二苦相、三無常相 一不浄者」の章に、次のように具体的に説明されている。

況復命終之後、損捨塚間、經一二日乃至七日、其身腫脹、色變青瘀、臁爛皮穿、膿血流出、鷲鷲鴛鴦、野干狗等、種種禽獸、噉掣食噉、禽獸食已、不浄潰爛、有無量種虫蛆、雜出鼻處、可惡過於死狗、乃至成白骨已、支節分散、手足髑髏、各在異處、風吹日曝、雨灌霜封、積有歲年、色相變異、遂腐朽碎末、与塵土相和

物集高見著『廣文庫』⁽¹⁹⁾(第五冊)をみると、「九想」の項には、典拠を示してかなり詳細にわたって解説が加えられている。リアルな表現を通して虚無感を一層助長させる効果を挙げている。次に、参考のために一部を列挙して

おく。

九想の詩序 類雜集、八三

九相詩序、紅粉翠黛唯絲_ニ白皮_一、男女姪樂互抱_ニ臭骸_一、身冷魂去棄_ニ之荒原_一、雨灌日瀑須臾爛壞……（中略）

第一新死相、平生顔色病中衰、芳體如_レ眠新死姿、恩愛昔朋留尚有、飛揚夕魂去何_レ之、眼花忽盡春三月、命葉易_レ零秋一時、老少元來無_ニ定境_一、後前難_レ追速將遲、

第二肪脹相、（下略）

第三血塗相、（下略）

第四肪亂相、（下略）

第五瞰食相、（下略）

第六青瘀相、（下略）

第七白骨相、（下略）

第八白骨散相、（下略）

第九成灰相、（下略）

『佛教大辭彙』（大正三年六月刊）の「九想」の頁にも類似の分類がある。

「九相絵」についての説明は、この程度にして、椎名の「九相絵」体験及び銀次郎のそれについて論をつづける。一般的にいえば、我々が幼児期に享けた死の脅威の心的残像とでもいえるものの後遺作用は、体験の痕跡の程度の差違はあっても、生涯にわたって意識されないまま精神構造の深部に必然的に受け入れられるのである。そして、それは我々の内的受難史を形成し規定するのである。

椎名が幼児期に享けた所謂「地獄絵」体験は、死後地獄に落ちて多くの前世からの死人達と一緒に地獄の責苦をうけるという絵画の体験ではない。「九相絵」に描かれた死人は、生まれ変わった絵図ではなく、自己ひとりの全く孤独な死を死んでいった屍体が、換言すれば、靈魂が肉体に宿しているとするとするならば、その靈魂の脱け殻である屍体が、例えば、檀林皇后のように風葬というかたちで捨てられ、異臭を放って徐々に自然の必然的な法則に従って腐敗菌による変化を正確にすすめ、犬や鳥が漁り、やがて風化という化学的、物理的变化によって遂には無化してゆくのである。

こうした「九相絵」のリアルな表現過程は、「地獄絵」にみるあくまで想像である世界とは、根本的に異なるのである。従って、屍体の悪臭を放って腐敗してゆく実相を凝視することで女性への愛欲の妄念を去ろうとする九相観の所謂観想をひとつの主題とした谷崎潤一郎の「少将滋幹の母」は別にしても、同じ文学者で、太宰治、正宗白鳥、斎藤茂吉等に散見できる「地獄絵」体験とは、表面的な死の恐怖、脅威の点では類同の点もみられるが、その影響、感受というような内在的なものには、かなりの差異がみられるのである。さて、「永遠なる序章」における「死の対立の構図」は、椎名自身に内在する光と影として位置付けられるのである。

戦争中、軍医であつた銀次郎は、ニヒリスト、マテリアリスト、コミュニストでもあつた。銀次郎にとつては、数多くの女性達との交渉は、すべて即物的関心のみで、愛の觀念が介在する余地は全くといっていい程なく、ついに、実の妹の登美子までもセックスの対象にしてしまう。しかも、こうした近親相姦は、やはり、彼女が銀次郎と同じように無感動な面を持っているところに、かえって魅力を感じて犯してしまうということになるのである。銀次郎は、マトリョシヤという少女を凌辱した世界苦と無関心病、人間存在の醜惡な姿の権化ともいえるドストエフスキの『惡靈』の主人公のスタヴローギンのような人物であり、また、『白痴』のラゴージンの獣性の一部を